

## 講習の内容（概要）

### ①オオサンショウウオの生態など

日本の固有種で世界最大級の両生類。岐阜県から大分県に分布し、中国山地が分布の中心となっている。夜行性で、主に魚、甲殻類、両生類を食べ寿命は長い。生きた化石とも言われる。

文化財保護法で特別天然記念物に指定されており、物であれば国宝の位置付け。

### ②東広島市における調査結果

椋梨川で30年間自主調査を行っていた地元団体の取組を引き継ぎ、調査体制の整備と情報発信に取り組んでいる。調査の結果、成体数60個体（中央値：全長77.5cm 体重2.9kg）幼生数700～800個体/年、自然巣穴7、10年連続の繁殖行動確認など実態把握ができた。

### ③オオサンショウウオの減少と河川環境

椋梨川では、川に設置された堰堤に、上流の巣穴（繁殖地）への遡上が阻まれている。幼生と親はいるが、その間の世代がないため、サンショウウオが絶滅する可能性がある。（水内川・西城川には「その間の世代」もいる）

堰堤の下流側には多数のサンショウウオが集まり、アユの捕食がある。（食害の発生）堰周辺以外にいる個体の場合、胃内容物はカニ、カワムツで量も少ない。

幼生減少の原因として、水田への流出、下流域の餌不足があり、対策として、堰堤へのスロープ設置で河川内の移動を容易にするなど、すみやすい川づくりが必要。

オオサンショウウオは食物連鎖の頂点にあり、頂点の生物の保全は、生態系全体の保全につながるため、重要である。

### ④情報発信

オオサンショウウオについて、観察会・イベント・現地説明会・出前授業・報道・出版・ストラップ作成・保護展示施設の設置などの様々な手段により、多方面で幅広い活動を展開している。

### ⑤交雑種について

他府県において、中国オオサンショウウオとの交雑種の発生と生息域の拡大が問題になっている。広島県においても、本年、広島市の八幡川で交雑種が見つかり報道された。上流にあるダムで調査した結果、既に8割が交雑種であった。八幡川は、在来種の個体数が少なく、若齢個体も見られないため、絶滅の危機にある。

中国オオサンショウウオは大型で気性が荒く、貪食で繁殖力が強い。在来種の雄よりも強く、繁殖行動において在来種雄を圧倒するため、交雑種が増加する。分布が拡大すると、食害も増える可能性がある。京都府では、在来種は30年間で2%まで減少した。

### ⑥今後必要な対策

オオサンショウウオの数は減っているが、豪雨などで流下し、遡上を阻害する工作物で上流に戻れず、あまり食べない生き物だが、中下流で食害が発生することがある。上流への人為的な移送や自力遡上が可能となる、制度や河川環境の整備が必要。（ただし、在来種以外の遡上には充分注意する必要がある）

中国オオサンショウウオと交雑種の生息域拡大の防止は緊急の課題であり、移動禁止や駆除が可能となる特定外来生物への位置付けが必要である。位置付けるには、遺伝子検査ではなく見ることでの在来種との区別がつかうことが不可欠であり、現在、視覚による判定方法の開発が進められている。

### ⑦質疑

（問）県の北東部でサンショウウオが増えているのはカワウの食害で魚が減ったためか。

（答）卵は親が保護しており、食べられることはないため、魚の多い・少ないは無関係だが、幼生は魚に食べられることがあるので、関係があるかもしれない。